

9月14日（日）15:00～17:00

話題提供者	
<p>「認知症高齢者の『言葉の出口』を開く集団回想描画法」</p> <p>ある老人ホームで「集団回想描画法」を用いたグループワークを始めたのは今から10年以上も前になる。参加者には、ここを「終の棲家」と選び全国各地から入居してきたものの、新たな隣人関係がうまくいかず自室に閉じこもりがちになったり、認知症が発症し日々消えていく自分と格闘する中で、妄想や徘徊などの周辺症状にさいなまれたりしている人たちがいる。</p> <p>回想描画法は四季折々の果物、野菜を五感で楽しみ、なつかしい事柄を回想し、それらを描画という方法で視覚化し、さらにその描画を参加者と共有するプログラムである。生きてきた道を回想描画することで記憶の糸が紡がれ、微かなまとまりとなって言葉の出口が開いていく。その微かなまとまりは日々老いを生きる彼らそして介護者相互に、何かほのぼのした温もりを吹き込んでいるように感じられる。</p> <p>今回のシンポジウムでは、認知症高齢者をリサーチパートナーとした現場の出来事をお話したい。</p>	<p>緒方 泉（九州産業大学）</p>
<p>「被災地の子ども描画と遊びのケア」</p> <p>東日本大震災発災後、石巻の画家柴田さんから、子供達を遊ばせてあげる場を作りたいんだと相談されたのは2011年3月26日の夜、石巻市役所ででした。日常を失った人々がひしめき合う避難所で過ごす子供達が唯一年齢に関係なくできたことはお絵かきでした。それ以後「避難所クラブ」からNPO法人にまで発展する子供の遊び支援を行う柴田さんの活動とその効果、東北大学病院小児科看護外来で出会った被災した子供達のケアについて話題を提供させていただきます。</p>	<p>塩飽 仁（東北大学）</p>

「描画からコラージュへ，治療からケアへ」

37年間の精神病院の「心理臨床」と、その後5年間の私設心理相談の「家族と心のケア」で、描画をどのように使用してきたか、その有用性や有効性について報告する。

精神病院では統合失調症・アルコール依存症・パーソナリティ障害・心的外傷後ストレス障害等に、私設心理相談では新型のうつ病・双極性障害や発達障害等に、描画法を適用してきた。描画は、安全で治療的な「環境作り」や「関係作り」に貢献し、特に急性期を脱出する時期や回復が進展する時期など言語の発展的な使用が困難な時期に、行き詰る雰囲気や負荷を和らげてくれた。また、言語化できない混沌の中に秘められたエネルギーから創造性や回復力を導き出し、ありのままの自己や本当の自己を取り戻すことに役立った。

杉野 健二  
(みえ家族と心のケア相談室)